

平成 30 年 4 月 4 日

南の風 266

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

265号の続きです。

コーチはテクニカル・スキルだけでなく、ヒューマン・スキルにも目を向けるべきだが、目に見えにくい（計量化しにくい）と書きました。

具体的な例を挙げます。ゲームの中で3Pシュートを8回打って、6回成功したとします。素晴らしい決定率と言えます。しかし、その選手がシュートに行くべきシチュエーションが、15回あったとしたらどうでしょう。ということは、残りの7回はチャレンジしなかったこととなります……。

あるいはゲーム中のパスのやり取りで、一見「パスミス」にみえたとしても、パスナーは絶妙のタイミングでパスを放ったとします。レシーバーの反応が遅かったために捕ることができなかったのならば、それはパスミスというよりキャッチミスということになります。

つまり、表れた数字や現象で評価することは危険なのです。にも拘わらず、選手を評価するコーチや指導者が数字や現象だけを見て判断してしまえば、その選手にとっても、チームにとっても不幸なことです。ですからチームのコーチや指導者は、そうした定量化されたものだけでなく、定性的なものもしっかり目を向け、評価することが非常に大事です。ゲームを注意深く見ていると、数字には表れなくても、強い意欲を持って献身的な働きをしている選手がいます。

そうした見過ごされがちなところをきちんと見て、正しい評価をすることは、チーム内のモチベーションを上げ、信頼関係を築く上で欠かせないこととなります。

先般の平昌冬季五輪の女子パシュートで、日本は見事金メダルに輝きました。しかも五輪新記録でした。(53秒89)

決勝は宿敵オランダとの戦いでした。決勝では、高木菜那、高木美帆、佐藤綾乃の3選手が出場し、上記のような圧巻のタイムで優勝しました。この3人の大活躍は、今さら言うまでもありません。素晴らしいスケーティングでした。

しかし、実はこの決勝戦の前の準決勝のカナダ戦が大きなカギを握っていたのです。準決勝には決勝に出場した3人ではなく、高木姉妹と菊池彩花選手がエントリーされました。決勝戦の後、菊池選手は、「準決勝での私の役目は、3人（高木姉妹、佐藤選手）が決勝に向けて、体力を温存できるように、壁（できる限り先頭に立って風よけになること）となって滑ることでした。」と語っていました。彼女は、170cmと体格に恵まれた選手なのです。彼女の自己犠牲（自分は決勝には出ないが準決勝で役割を全うする）の精神がなければ、金メダルも五輪新記録もなかったのではないのでしょうか。

菊池選手のこの言葉こそ、チームジャパンのために頑張る、数字には表れないヒューマン・スキルの最たるものだったと思います。決勝戦を祈るような思いで見つめていた、菊池選手の姿がたいへん印象的でした。彼女は正に、パシュートチームジャパンの影のヒロインでした！！

もう一度言います。このように数字や結果には直接表れない、選手の献身的なチーム愛や努力を、我々コーチや指導者は見逃さずに評価しなければなりません。